

交易商人の驚きから現れた言葉

杉本隆司訳 以文社 2916円

フェティッシュとは何か その問いの系譜

ウィリアム・ピーツ〈著〉

フェティシズムという概念は、一八世紀フランスの思想家ド・ブロスが定式化したもので、アフリカの住民の間で行われていた護符・呪物崇拜を意味していた。アダム・スミス以来経済学者が商品の価値をその生産に要した労働から来ると考えたのに対して、マルクスは『資本論』で、物の交換価値を、物に付着したフェティッシュ(霊)のようなものだと考えた。しかし、このフェティシズムという概念は、よく使われるわりに、まともな論じられていない。マルクス主義者も、もっぱら物象化(人間と人間の関係が物と物の関係としてあらわれること)を論じ、フェティシズムについては嘲笑的なジョークとして使ってきただけである。本書が独自のなのは、フェティシズムがいかに生じたかを理論的に考察するかわりに、フェティッシュという言葉がいかに出現したかを歴史的に考察したことである。フェティッシュは、アフリカにあった言葉ではなく、ラテン語から作られた新造語であった。そして、それは、十五世紀に、ポルトガルの商人がアフリカ人と交易したことから生じた。彼らは、西洋人がガラグタと見なす物を得るために、アフリカ人がすすんで金を手放すのを見て、驚きあきれて、それをフェティッシュと呼んだのである。以来、スペイン人、オランダ人が西アフリカに交易のためめもやってくるが、その間にこの言葉が定着した。さらに、ド・ブロスがそれを一般理論化し、キリスト教でいう偶像崇拜と区別して、フェティシズムと呼んだ。本書が示すのは、フェティシズムが、アフリカあるいは未開社会にあったものではなく、それが西洋の商人資本主義と遭遇したときに見出されたということである。思えば、フェティッシュという概念は、未開社会にあったというより、近代の西洋人をかきたてた、商品・貨幣の物神崇拜から生まれたのである。そして、それは今もますます、世界を席卷している。



William Pietz 51年生まれ。哲学博士。米国各地の大学で講師を務める。ロサンゼルス大学の党結成に尽力。

評・柄谷 行人

哲学者